

# 平成18年度「公開講座・公開授業アンケート調査」：実施報告

生涯学習教育研究センター助教授 木暮照正

## 1 この調査について

生涯学習教育研究センターでは、平成13年度より継続的に公開講座受講者等を対象としたアンケート調査を実施し、その概要をセンター年報に報告してきた(筒井・木暮, 2002; 木暮・筒井, 2003; 木暮, 2004; 木暮, 2005; 木暮, 2006)。本年度も同種のアンケートを実施したので、ここにその概要を報告する。

調査1は「公開講座」の受講者を対象としたアンケート結果であり、調査2と3は「公開授業」の受講生及び授業担当者を対象としたアンケート結果である。質問票は原則として昨年度まで使用してきた形式と同じであるが、簡略化のために若干の修正を加えている。

## 2 調査1：公開講座受講者向けアンケート調査

### 目 的

調査1は、昨年度の調査(木暮, 2006)等に倣い、今年度福島大学公開講座の受講者を対象に実施した。今年度は合計19講座を企画し、そのうち15講座を開講した。アンケート調査は、南相馬市教育委員会との共催実施の講座(「家庭教育講座『元気に子育て!』」)を除く14講座で実施した。

講座名と開設期間は下記の通りである。

- ・「自然との共生」について考える(平成18年5月)\*
- ・孤独死を生み出す“孤人主義”の社会としての現代社会(平成18年5月～7月)\*
- ・人類史の過去・現在を読み解き、未来を問う—政治経済学の視座から—(平成18年6月～8月)\*
- ・ガリレイからニュートンまで—力と運動、その法則—(平成18年7月)\*
- ・福祉へのまなざし(平成18年5月～6月)
- ・気になる日本語、お答えします。(平成18年5月～6月)
- ・のぼさう健康寿命—楽しい運動プログラム—(平成18年6月)
- ・眠りと夢の不思議をさぐる(平成18年7月)

- ・染色教室—理論から趣味まで—(平成18年7月～8月)
- ・学校臨床の現場から(平成18年9月)
- ・頭と心のサイエンス：頭脳編(夜間)(平成18年9月)
- ・頭と心のサイエンス：心理編(夜間)(平成18年10月)
- ・日本近代文学と西欧(平成18年10月)
- ・頭と心のサイエンス：心理編(昼間)(平成18年11月)

\*本学名誉教授担当講座

### 調査方法

#### 被調査者

今年度福島大学公開講座を受講した方のうち、アンケートに回答した125名(延べ数)を対象とした。一人で複数の講座を受講した方もいたため、データには重複がありうる。

#### 質問紙構成

問1は被調査者の個人属性に関する質問項目群であった。年代(問1-1)・性別(問1-2)・市町村レベルの住所(問1-3)・職業(問1-4)・最終学歴(問1-5)をそれぞれ質問した。

問2は、受講者が過去1年間(平成17年4月～平成18年3月の期間)に何回の生涯学習講座に参加したかを問う質問項目であった(問2-1)。

問3は今回受講した公開講座に関する質問項目群であった。講座を知った情報源(問3-1;複数回答)・受講講座の難易度(問3-2)・講座に対する感想(問3-3;自由記述)をそれぞれ質問した。

問4は福島大学公開講座に対する要望を問う質問項目群であった。どのような種別の講座を希望するかを「教養を重視した講座(例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座)」「資格取得を目指した講座(例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座)」「趣味を充実させる講座(例：スポーツ講座やガーデニング講座)」「その他(被調査者側で具体的に記述)」から選択させた(問4-1;複数回答)。最後に全般的な要望について

質問した（問4-2：自由記述）。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

### 手 続

被調査者の便宜を考慮し、各公開講座が終了する1つ前の回でアンケート用紙を受講者に配布し、終了回に受付に提出を求めた。

### 結 果

以下、アンケート集計の結果概要について述べる。データ総数は125であるが、項目によって欠損値があったため、合計がデータ総数にならない箇所もあった。また、定量的な側面を重視したことから、自由記述による回答部分についてはその報告を割愛する。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表1-1に年齢と性別の分布を示した。性別比では、女性が3分の2を占めた。男性では60歳

表1-1 公開講座アンケート：年代と性別の分布

年齢範囲	全体	男性	女性
10歳代	1	0	1
20歳代	7	2	5
30歳代	14	3	11
40歳代	18	3	15
50歳代	32	9	23
60歳代	45	24	21
70歳代以上	8	2	6
計	125	43	82

表1-2 公開講座アンケート：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	92	32	60
伊達市	6	3	3
郡山市	5	2	3
川俣町	4	2	2
二本松市	4	0	4
仙台市	2	2	0
白河市	2	0	2
飯野町	2	1	1
会津若松市	1	0	1
会津美里町	1	0	1
宮城県角田市	1	0	1
猪苗代町	1	1	0
白沢村	1	0	1
本宮町	1	0	1
矢吹町	1	0	1
桑折町	1	0	1
計	125	43	82

代が、女性では50-60歳代がそれぞれ多かった。表1-2に市町村レベルの住所の回答分布を示した。本学の立地する福島市居住者が約4分の3を占めていた。表1-3に受講者の職業分布を示した。男性では無職が、女性では専業主婦と公務員がそれぞれ多かった。表1-4に受講者の最終学歴の回答分布を示した。男性では大学卒が多く、女性では大学卒と高校卒がそれぞれ多かった。

問2の回答から受講者の過去1年間の生涯学習参加傾向を示す。表1-5に過去1年間の生涯学習参加の回数を示した。「0回」が最も多いが、「1回」「2回」「3回」までの回答者は二桁あり、また最大で「10回」と回答した者も3名いた。

表1-3 公開講座アンケート：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	16	7	9
公務員	20	4	16
自営業	12	6	6
専業主婦	21	0	21
パートタイマー	11	4	7
無職	21	14	7
その他	22	8	14
計	123	43	80

表1-4 公開講座アンケート：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	39	12	27
専門学校卒	16	3	13
短大卒	10	2	8
大学卒	57	25	32
その他	2	0	2
計	124	42	82

表1-5 公開講座アンケート：過去1年間の生涯学習参加回数

参加回数	全体	男性	女性
0	45	11	34
1	18	5	13
2	24	10	14
3	11	4	7
4	6	1	5
5	7	4	3
6	1	0	1
7	2	2	0
10	3	3	0
計	117	40	77

問3の回答から講座を知った情報源と受講講座の難易度評価の傾向についてまとめる。表1-6に講座を知った情報源の回答分布を示した。「新聞の折り込みチラシ」を通じて知ったという回答が例年通り多い傾向にはあるが、「講座・セミナー案内」（過去数年で福島大学公開講座を受講したことがある市民に対して送付している）を通じて知ったという回答や「知人・友人」を介して知ったという回答、「インターネット」を通じて知ったという回答も比較的多かった。とくに男性では「知人・友人」が最頻値となっている。

表1-7に受講講座の難易度評価の回答分布を示した。男女差は見られず、「ちょうどよかった」という意見が約3分の2を占めた。

表1-6 公開講座アンケート：講座を知った情報源（延べ数）

情報源	全体	男性	女性
新聞折込チラシ	16	11	35
新聞記事	6	3	3
インターネット	16	6	10
知人・友人	22	12	10
講座セミナー案内	30	9	21
福島大学図書館	5	2	3
職場にて	3	0	3
大学に直接問い合わせ	2	1	1
別講座にて紹介	2	0	2

表1-7 公開講座アンケート：受講講座の難易度

講座の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	1	0	1
やや易しかった	17	4	13
ちょうどよかった	84	26	58
やや難しかった	17	10	7
難しかった	2	2	0
計	121	42	79

問4の回答から、福島大学の公開講座に対する要望の傾向をまとめる。表1-8に福島大学に希望する生涯学習内容の回答分布を示した。教養型講座の希望が最も多く、次に趣味型、資格型の順であった。

表1-8 公開講座アンケート：福島大学に希望する生涯学習内容（延べ数）

タイプ	全体	男性	女性
教養型	85	27	58
資格型	29	9	20
趣味型	38	8	30
その他	16	7	9

## まとめ

今年度の特徴として、まず全般的な高齢化が挙げられる。昨年度までは40-50歳代女性の参加が最も多かったのだが、今年度は60歳代以上の比率が著しく増加していた（平成17年度：19.6%；平成18年度：12.4%）。この傾向はとくに男性において顕著であった（男性：60.5%；女性：32.9%）。この原因については一概にはいえないが、可能性としては2つ考えられる。まず、今年度より本学名誉教授の先生を講師とした公開講座を本格的に開催したことにより、高齢者層が参加しやすくなったという可能性である。一般に、自分よりも年齢の若い講師から学ぶということはやはり躊躇されるであろう（これはアンケートの自由記述にもしばしば寄せられるコメントでもある）。高齢者の場合、現役の大学教員はほとんど年下ということになり、このことで参加がためらわれる可能性も考えられる。もしそうであるならば、名誉教授が講師であれば、高齢者にとっても（年上ということはなくとも同世代ということで、相対的に）「先生らしい」講師による講座となるはずである。試みに、名誉教授講座に限定してその年代分布を再整理してみると、60歳代の参加者比率は約60%であり、全体の傾向（12.4%）よりも際立っていた。なお、次年度もこの名誉教授公開講座は継続して実施をする予定であり、この可能性についてはできるだけ追跡的に検討を進めたい。

もう一つは、いわゆる団塊世代の退職者が積極的に公開講座に参加し始めたという可能性である。これは、男性高齢者の比率が急増している点がある程度説明できる。ただし、今回のアンケートからは大まかな年代（例：50歳代、60歳代）と職業等しか判別できないため、実際にどれほどの団塊世代が参入しているのかは断定できない。これも今後のアンケート調査等で吟味する必要があるだろう。

団塊世代はいろいろな分野で注目を集めているが（例えば、帰農従事者として、あるいは観光業の主要な顧客として）、これは生涯学習の分野でも例外ではない。どうやって団塊世代（とくに男性）を生涯学習社会に呼び込むかが、ここ2-3年の主要なテーマともなっている。もしも大学主催の公開講座がその契機の役割を担うことができるのだとすると、今後ますます団塊世代のニーズに合致した講座企画を重点的に行うことが肝要となってくる。また、団塊世代は新しい地域社会の担い手としても期待されているので、単に講座の顧客としてだけではなく、地域リーダーとして

今後主体的に活躍してもらうためのステップとなるような講座やワークショップ等の企画を検討する余地もあり、この点も今後の検討課題といえる。

全般的な高齢化以外の特徴点としては、講座を知った情報源に変化が見られたことが挙げられる。昨年度までは「新聞折り込みチラシ」が主要な情報源であり、これに、既受講者に配布している「講座・セミナー案内」が続いていた。今年度はさらにこれらに加えて「インターネット」や「知人・友人」を通じて知るケースも相対的に増えていた。新聞折り込みチラシは新しく大学公開講座を知ってもらうためには絶大な効果を発揮するが、既に公開講座の存在を認知している人にとってはむしろインターネットを使って自分で調べたり、知人・友人から口コミで教えてもらったりの方が具合がよいということも考えられる。講座の情報収集における役割分担についても今後のアンケート調査等で吟味する必要がある。

### 3 調査2：公開授業受講生向けアンケート調査

#### 目 的

今年度は47科目（通期科目1科目・前期科目21科目・後期科目25科目）を公開授業として開放し、延べ114名の方を受講生として受け入れることができた。学内業務の多忙化のためであろうか、昨年度と比べて、開放科目数は27科目減であった。しかしながら、受け入れ受講生は12名の減にとどめることができた。昨年度と同様に、受講生および担当講師を対象にアンケート調査を実施したが、この項ではまず受講生向けアンケートの結果を報告する。

#### 調査方法

##### 被調査者

今年度の公開授業を受講した方のうち、平成19年2月上旬の段階でアンケートが回収できた60名(延べ数)を対象とした。一人で複数の講座を受講した方もいたため、データには重複がありうる。

##### 質問紙構成

問1は、調査1の問1と同様に、被調査者の個人属性に関する質問項目群であった。年代（問1-1）・性別（問1-2）・市町村レベルの住所（問1-3）・職業（問1-4）・最終学歴（問1-5）をそれぞれ質問した。

問2は、受講者が過去1年間（平成17年4月～平成18年3月の期間）に何回の生涯学習講座に参加したかを問う質問項目であった（問2-1）。

問3は、今回受講した公開授業に関する質問群であった。公開授業を知った情報源（問3-1；複数回答）・受講講座の難易度（問3-2）・講座に対する感想（問3-3；自由記述）をそれぞれ質問した。

問4は、調査1と全く同様で、福島大学公開講座に対する要望を問う質問項目群であった。どのような種類の講座を希望するかを「教養を重視した講座」「資格取得を目指した講座」「趣味を充実させる講座」「その他」から選択させた（問4-1；複数回答）。最後に全般的な要望について質問した（問4-2；自由記述）。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

#### 手 続

公開授業の担当講師に受講生用のアンケートを事前に配布し、実施を依頼した。開放コマの終了回にアンケート用紙を受講者に配布していただき、回答後に担当講師に提出していただくという方式で行った。

#### 結 果

以下、アンケート集計の結果概要について、表を参照しながら述べる。データ総数は60であるが、項目によって欠損値があるなどしたため、合計がデータ総数にならない箇所がある。また、定量的な側面を重視したことから、自由記述による回答部分についてはその報告を割愛する。

問1の回答から被調査者の個人属性の分布傾向についてまとめる。表2-1に年齢と性別の分布を示した。男性・女性ほぼ同数であり、全体としては50歳代が最も多く、その次に60歳代が多かった。表2-2に市町村レベルの住所の回答分布を示した。福島市居住者が

表2-1 公開授業アンケート：年代と性別の分布

年齢範囲	全体	男性	女性
10歳代	1	0	1
20歳代	4	1	3
30歳代	5	3	2
40歳代	8	4	4
50歳代	21	7	14
60歳代	16	14	2
70歳代以上	5	2	3
計	60	31	29

表2-2 公開授業アンケート：住所分布

住所	全体	男性	女性
福島市	39	21	18
郡山市	8	4	4
伊達市	5	5	0
川俣町	4	1	3
二本松市	2	0	2
会津若松市	1	0	1
猪苗代町	1	0	1
計	60	31	29

表2-3 公開授業アンケート：職業分布

職業	全体	男性	女性
会社員	9	7	2
公務員	7	5	2
自営業	6	3	3
専業主婦	13	0	13
パートタイマー	2	0	2
無職	15	14	1
その他	7	2	5
計	59	31	28

表2-4 公開授業アンケート：最終学歴

学校歴	全体	男性	女性
高校卒	13	4	9
専門学校卒	3	1	2
短大卒	5	1	4
大学卒	36	22	14
その他	3	3	0
計	60	31	29

表2-5 公開授業アンケート：過去1年間の生涯学習参加回数

参加回数	全体	男性	女性
0	26	13	13
1	6	2	4
2	6	5	1
3	6	0	6
4	8	7	1
5	1	0	1
8	2	2	0
10	2	1	1
計	57	30	27

約3分の2を占めていた。表2-3に受講者の職業分布を示した。男性では無職、女性では専業主婦がそれぞれ多かった。表2-4に受講者の最終学歴の回答分布を示した。男女ともに大学卒が多かった。

問2の回答から受講者の過去1年間の生涯学習参加傾向を示す。表2-5に過去1年間の生涯学習参加の回数を示した。男女ともに「0回」との回答が最も多いのだが、その次は男性で「4回」、女性で「3回」と、生涯学習講座への参加度に二極化の傾向が見られた。

問3の回答から公開授業を知った情報源・受講した公開授業の難易度についてまとめる。表2-6に講座を知った情報源の回答分布を示した。男女ともに「新聞の折り込みチラシ」を通じて知ったという回答が最も多かった。それ以外では、「インターネット」及び本学発行の「講座・セミナー案内」を通じて知ったという回答が多かった。表2-7に受講した公開授業の難易度評価の回答分布を示した。大きな男女差は見られず、「ちょうどよかった」という意見が3分の2を占めた。

表2-6 公開授業アンケート：講座を知った情報源(延べ数)

情報源	全体	男性	女性
新聞折込チラシ	25	11	14
新聞記事	5	4	1
インターネット	11	8	3
知人・友人	5	0	5
講座セミナー案内	11	6	5
大学に直接問い合わせ	4	1	3

表2-7 公開授業アンケート：受講講座の難易度

講座の難易度	全体	男性	女性
易しすぎた	1	1	0
やや易しかった	12	6	6
ちょうどよかった	39	17	22
やや難しかった	7	6	1
難しかった	0	0	0
計	59	30	29

問4の回答から、福島大学の公開講座に対する要望の傾向をまとめる。表2-8に福島大学に希望する生涯学習内容の回答分布を示した。教養型講座の希望が最も多く、次に資格型、趣味型の順であった。

表2-8 公開授業アンケート：福島大学に希望する生涯学習内容（延べ数）

タイプ	全体	男性	女性
教養型	41	20	21
資格型	14	6	8
趣味型	11	5	6
その他	8	6	2

### まとめ

昨年度に引き続き、今年度も、福島市街地のサテライトキャンパスである「街なかランチ」で開講される現代教養科目（平日夜間及び土曜日午後）に開講を原則として公開授業とした。このため公開講座と比べて、相対的に男性会社員の参加が多かったといえる。経年変化をみると、現代教養科目が未開講であった平成16年度は1名であったが、開講初年度の平成17年度では10名まで急増し、2年目である今年度（平成18年度）は7名と数値上は減少であるが、安定した人数であったと評価できる。

過去1年間の生涯学習参加回数については、昨年度からやや微増傾向にはあったが、今年度は「二極化」にまで進行した。すなわち、過去1年間で生涯学習講座への参加はないとの回答が一般的には多いのだが、参加したという回答者ではむしろ複数回が多くなっていった（男性では「4回」、女性では「3回」が多かった）。この二極化の原因は現時点では判然としないが、大学主催の企画にはリピーター層が多いという傾向がいわれており、本学でもその傾向が顕著になりつつあるという可能性がまずは考えられる。これは本学への「ファン層」が増えたとも解釈できるので、その意味では好ましい傾向なのであるが、その一方で、同じ内容や系統の講座企画では早々に飽きられてしまい、離反化が生じるという危険性もまた孕んでいる。とくに公開授業は正規学生向けの授業を開放しているのだから、年度ごとに企画を変えることができる公開講座とは異なり、どうしてもメニューの固定化が起きてしまう。これは避けようのないことなので、もしもリピーター層が増大し、これが主要な講座受講者をなしているということが明らかとなった場合には、公開授業よりも公開講座に力点を置くようなシフトが必要になってくると思われる。

## 4 調査3：公開授業講師向けアンケート調査

### 目的

調査3では福島大学公開授業の担当講師を対象とした。

### 調査方法

#### 被調査者

今年度の公開授業の担当講師のうち、平成19年2月上旬の時点でアンケートに回答した29名を対象とした。

#### 質問紙構成

問1は公開授業に関する質問項目群であった（全て自由記述）。公開授業の形態（問1-1）、公開授業の設定回数（問1-2）、および公開授業への感想・意見（問1-3）をそれぞれ質問した。

問2は、福島大学の生涯学習支援活動に対する要望を問う質問項目であった（問2-1：自由記述）。

なお、具体的な質問紙構成は本稿末尾の資料を参照いただきたい。

### 手続

公開授業の担当講師にアンケート用紙を事前に配布し、回答を依頼した。調査2のアンケート用紙と併せて、生涯学習教育研究センター宛に提出を求めた。

### 結果

講師向けアンケートは全ての項目が自由記述であり、定量的な集計を行うことが難しい。このため、回答を列記することで報告に代えたい。但し、一部抜粋したり補足説明を加えたりした箇所もあるため表現が回答通りでない場合もあることを申し添えておく。また、「よかった」「とくになし」といった具体的な内容にまで言及されていないコメントは割愛をした。

問1の回答から公開授業に対する評価についてふれる。公開授業の形態に関する回答は以下の通りであった（順不同）。

- 興味のある人は、どんどん受け入れていいと思います。
- 年輩の方の勉強の様子に、学生たちも興味をもっているようです。
- とてもいいと思いますが、市民の者は学生よりレベルが高いために学生が不安な気持ちもありました。
- 知識レベルが違いすぎるので、無理が大きい。
- 担当2年目でもあり、私としても特段の意識は

なかった。受講生としても正規学生と年齢層が変わらないので違和感はないのではないかと。

- たいへんよい機会になっています。特に周辺の人々の意見を聞いたり、つながりを持てる事など。
- これ以上受け入れ人数を増やさないとよい。
- 意欲的な方がいる。他の受講者、講師とも一定の緊張感があって授業により影響があると感じた。
- 知識を深めるための科目ではよいが、技術（スキル）を身につけさせるような科目では単位取得への姿勢が異なると思われるため一緒だと難しいと思われる。
- 市民に公開する意味があると同時に、そういう方も含めての話し合い活動も有意義なものであった。なお、その市民の方も熱心に受講されていた。
- 公開授業を受講するような方は、熱心でモチベーションも高い方なので学生にも良い影響を与えていると思います。
- 良いと思いますが、ずっと欠席でした。
- 座学の講義形式では、市民の方と一般学生の区別はつかず、一緒に授業を受けていただいても何も問題ありません。
- 学外の方がいるので、ほどよい緊張感がありました。「形態」について異論はありません。結構なことだと思います。
- 単位をとりただけの学生など目的の異なる聴講者が多様に存在することにプレッシャーを感じる。

公開授業の設定回数に関しては、おおむね現状でよい（つまり、試験等を除き原則開放）との回答が大多数であったので、自由記述部分の詳細は割愛する。

公開授業への感想・意見に関する回答は以下の通りであった。

- 公開授業をつづけて行きたいと思います。
- まじめで熱心に聴いてくださったのでよかった。ただし、受講者の興味・関心・予備知識等には相当のバラツキがあるので、全員が理解でき満足できるものとするのは困難である。
- 一般学生の方が、はるかに熱心だった。
- 現代教養コースでの担当でしたが、夜のためか公開に対する参加者が少なかったです。
- もっと多数の参加を望む。彼らの反応は経験豊かな人生観からこちらにとってもとても有意義。
- 一般学生と比べ緊張感が低い。（欠席が多い。授業中寝るなど）
- 市民向けだとどの程度専門的な内容にしたらよいか戸惑ってしまいます。科目によっては本来学生に身につけてほしいレベルより下げざるをえない気がする。
- 新しい時代の、地域に根ざす大学として、積極的に位置づける意味がある。
- 試験も、事情が許せば、受けられるようにしてほしいといつも思います。
- 今後も、公開授業をもちたいと思います。
- 参加されていた市民の方々はみなさん熱心でした。
- 受講者が大変熱心で興味をもってくださったようなので、意義があったと思う。
- ずっと欠席でしたので残念です。
- 市民の受講者の方には、欠席せずに熱心な方がいます。去年受講した方が、又今年も受講する例がありました。内容を理解しきっていないのが理由の様ですが、あまり合理的な行動とは思われません。成績評価がないことも理由かと思えます。
- 20歳前後の学生が少なかったこと（年配者が多い）、私語をする人がほとんどなく熱心に授業を聞いてくれたこと。
- 公開授業受講生が開講時から減っているように思われる。その方々のニーズに合う内容ではないのかもしれない。

問2の回答から福島大学の生涯学習支援活動に対する要望についてまとめる。寄せられた回答は以下の通りであった。

- 受講料もっと下げてもいいのでは。
- とくに外国語についてですが、試験も受けられるようにはできないでしょうか。単位認定はしなくていいですが。
- つづいてほしい。なぜか学生と市民を混ぜた授業は雰囲気がいいし、楽しく勉強／教えることができます。
- 2、3年に1回は公開講座をやると世間とのつながりを反映でき、よいかと思っております。
- 高卒者と高齢者を一緒に教えるのは、苦勞を要した。
- 設問の趣旨に合うかどうかわかりませんが、①（市民からの）アンケート回答にあるように、受け入れの決定、通知が遅すぎる。②科目によっては、テキストが容易に入手できないものもあるのだから、生協の助けを借りるなどして、苦勞なく

開講に間に合うように入手できる方法を考えるべき。私は今年も生協でテキストを代金立替えて買って配りました。

- より多くの市民が知りうるようにより広い広報が求められるように思います。
- 街なかランチ利用促進を。
- 教員に公開するかどうかをきめさせるのも重要であるが、一定程度の“質的な品ぞろえ”をだすためには、大学として（又はセンターとして）公開してほしい授業を指定するなどの積極策も必要だと思います。
- 市民のニーズに対応する企画を全学参加のもとにデザインするとよい。
- 毎回書くことですが、とくに外国語の場合、テストは本人にとって重要なものです。できましたら、市民もテストをうけられる制度にしてもらえたら、と思います。
- 公開授業はもっと増えることが望ましい。
- 人数を5名以内に制限していますが、スペースだけの問題だったら、もっと上限を増やしても良いと思います。受講料7,000円は高すぎだと思います。“公開”を目的とするなら、もっと受講者を増やす方策をとっても良いかと思ひます。
- 学びたい者にオープンにすることはとても良いと思う。理工系の場合、企業技術者にもPRすると良いのではないかと思います。
- あくまで大学の授業を公開しているだけで、市民受講生のニーズに合っているのか疑問です。テーマや内容など他大学の市民向け公開講座とは、だいぶちがうかもしれません。市民受講生の方が、ひとりてぼつんと受講しているのが印象的です。他の学生との交渉は多くないようです。
- 3年に1回は公開講座をしたいが、1年前に日程を確保することに不安を感じる。

## まとめ

すべて自由記述であるので、定量的な評価が難しいことから、一意の結論を導くことは差し控えなければならぬ。これまでのアンケートと同様に、概ね公開授業に対しては好意的な評価が得られたといえるが、若干の懸念も残る。昨年度からの傾向であるが、ネガティブな評価が相対的に増えているようである。昨年度も挙げられていたネガティブな意見・見解としては、「学生と市民を一緒に教授することは困難な科目もあ

るので、その点をキチンと吟味整理しておくべきである」といったものがあつたが、今年度はこれに加えて「一般市民の方が却って不真面目である」という意見も寄せられていた。仕事をもった社会人の場合、すべての授業回に出席できないということはしばしば生じるであろう。これは講師から見て、正規学生と比べて不真面目に映る可能性はある。実際に市民本人が不真面目である場合は別としても、このようなコミュニケーション不足による誤解がもとでネガティブな評価が生じているのであれば、何かしらの手立てを講じる必要があろう。差し当たり妙案はないが、ミスコミュニケーションが主因であれば、講師と公開授業受講生とのコミュニケーションを促進するような工夫（例：公開授業の中間期に一度、講師と受講生とで座談会を設ける等）が手助けとなるはずである。

## 5 結びに代えて

本稿では今年度の公開講座・公開授業アンケートの概要を述べた。当アンケートは経年変化を把握するための継続的取り組みであるが、今回の結果概要からは、過去のアンケート結果と一部異なる傾向が認められたものの（全般的な高齢化傾向、新聞折り込みチラシ以外の情報源の相対的増加、生涯学習経験の二極化等）、重大な変化まではなかったといえる。

最後に、平成15年度より推進してきた公開授業について、これまで実施してきたアンケートから現状を整理し、今後の課題を述べておきたい。

これまでの4カ年にわたるアンケートからは、もちろん全般的には非常に好意的なコメントが受講生や担当講師から寄せられたと評価してよいだろう。代表的な意見は（繰り返しになるが）「市民の熱心さが学生や教師により意味での緊張感を与える」「人生の経験者としての視点から有意義な意見を述べてくれる」等である。この意見からは市民参加が本来の正規授業の活性化にも一役買っているという側面が読み取れ、地域連携・社会貢献になっているというだけでなく、いわゆる授業改善にもつながる可能性があるといえる。ただし、注意しなくてはならないのは、メインキャンパスである金谷川キャンパスでの公開授業は担当講師の許可制であり、講師自身が予め好意的な傾向をもっている可能性もあるという点である。この場合、たとえ市民の授業参加にある種のネガティブな側面がある



と感じていてもアンケート等にそれが顕在的には現れてこないことも含んでおかななくてはならない。これに対して、市街地キャンパスである「街なかランチ」で開講している授業の一部は原則開放としており、担当講師の許可制ではない。この場合、市民開放に対して思うところがあればアンケート等にも反映されてくる可能性が増大するであろう。この公開授業については、(正規授業を開放しているのであるから)本来の学生教育に差し障りがないように推進をする必要があるわけで、そのためにも、アンケートに反映されたネガティブなコメントは貴重な意見として尊重しなくてはならない。アンケートに上がってくるものの中で、とくに気がかりであるのは、「学生と市民とを同じ土俵で教授するのは困難」という趣旨の意見である。至極もっともな意見であるが、公開授業では原則として「通常授業をそのまま開放」することとしているので、市民への特別な配慮は本来必要ないはずである(市民も通常授業に参加するつもりで来学しているはずである)。しかしながら、講師側のごく自然な配慮として、どうしても市民向けにアレンジしなくては、という気持ちになるのであろう。このことによって授業自体が分かりやすいものになる等、正規学生にとってもプラスに働くのであれば結構なことだが、難易度を上げていく等、むしろマイナスに働いてしまうのであれば、本末転倒にもなりかねない。今一度、「正規授業に市民が参加する」という原則を明確化し再確認する必要があるのかもしれない。もちろん、これには「折角市民にオープンにしているのに何の配慮もしなくてもよいのか？」という懸念もあるだろう。しかし、この場合はあくまでも「正規学生にとってもプラスに働く」、あるいは最低でも「弊害にはならない」ということが条件であり、「むしろマイナス」という場合はやはり市民よりも正規学生が優先されるべきであると

考えられる。もしも市民への配慮が優先されるべきという意見が主流になれば、その場合は公開授業ではなくて公開講座等の枠組みで対応することの方が望ましいと思われる。今後の課題は、公開授業が正規授業を侵害しないということ以上に、正規学生にもプラスの影響が反映されるような公開授業の在り方を確立することにあると思われる。

## 引用文献

- 木暮照正 (2006). 平成17年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 11, 9-24.
- 木暮照正 (2005). 平成16年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 10, 5-20.
- 木暮照正 (2004). 平成15年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 9, 5-19.
- 木暮照正・筒井雄二 (2003). 生涯学習ニーズ調査—過去の公開講座受講者と今年度受講者との比較— 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 8, 3-12.
- 筒井雄二・木暮照正 (2002). 福島県における大学を連携させた公開講座の実施について：福島県大学間連携公開講座の報告 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 7, 3-8.

## 謝 辞

福島大学公開講座及び公開授業で担当講師を務められた方々および関係各位、とくにアンケートにご協力いただいた方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

公開講座名： \_\_\_\_\_

## 公開講座アンケート（受講者用）

福島大学生涯学習教育研究センター

福島大学公開講座を受講くださり、誠にありがとうございます。今後、福島大学において企画・実施する公開講座や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするために、みなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます。回答はすべて統計的に処理いたしますので、個人データが取り上げられるような心配はありません。

以下の項目にご回答いただき、次回の講座にこのアンケート用紙をご持参くださいますようお願い申し上げます。その他は担当講師や係員の指示に従ってください。

あなた自身についてお聞きます。

問 1-1. 平成 18 年 4 月 1 日時点での年代をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 10 歳代   2. 20 歳代   3. 30 歳代   4. 40 歳代  
5. 50 歳代   6. 60 歳代   7. 70 歳代以上

問 1-2. 性別をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 男   2. 女

問 1-3. お住まいはどちらですか？市町村レベルでお答えください（例：福島市）。

(                    )

問 1-4. ご職業は何ですか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で(                    )内に具体的にお書きください。

1. 会社員   2. 公務員   3. 自営業   4. 専業主婦  
5. パートタイマー   6. 無職   7. その他(                    )

問 1-5. 最後に卒業した学校の種別をお答えください（例：4 年制大学卒）。

(                    )

昨年度(平成 17 年度)1 年間のあなたの生涯学習講座への参加状況についてお聞きます。

問 2-1. 昨年度 1 年間(平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月まで)に、いくつの生涯学習講座(大学・公民館・民間開設の種別を問わず)に参加しましたか？回数を(                    )内にお答えください。なお、一連の公開講座など(例えば、4 回の講演会で 1 シリーズとするなど)は 1 回と考慮してください。

(                    )回

(1)

【裏面へ続きます】

今回受講された公開講座についてお聞きします。

問 3-1. 今回、この公開講座をどのような情報源からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください。「その他」の場合は「6.」に○をつけた上で（ ）内に具体的にお書きください。

1. 新聞の折込広告
2. 新聞の記事
3. テレビ・ラジオ
4. インターネット
5. 知人・友人の紹介
6. その他( )

問 3-2. 今回受講された公開講座の難易度はいかがでしたか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 易すぎた
2. やや易しかった
3. ちょうどよかった
4. やや難しかった
5. 難すぎた

問 3-3. 今回受講された公開講座に対する感想について、下の欄に自由にお答えください。

[ ]

福島大学の公開講座に対するご要望についてお聞きします。

問 4-1. 今後、福島大学が行う公開講座で、どのような内容（テーマ）の講座なら受講したいと思いますか？○はいくつつけても構いません。

1. 教養を重視した講座（例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座）
2. 資格取得を目指す講座（例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座）
3. 趣味を充実させる講座（例：スポーツ講座やガーデニング講座）
4. その他( )

問 4-2. 福島大学の公開講座に対するご要望があれば、下の欄内に自由にお答えください。

[ ]

以上で質問は終わりです。

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください。次回の講座に、このアンケート用紙をご持参いただきますようお願い申し上げます。その他係員の指示に従ってください。

ご協力ありがとうございました。

連絡先： 福島大学研究連携課研究連携企画係  
〒960-1296 福島市金谷川1番地  
TEL：024-548-5212 / FAX：024-548-5209

(2)

## 公開授業アンケート（受講生用）

福島大学生涯学習教育研究センター

この度は福島大学公開授業を受講いただき、誠にありがとうございます。

今後、福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするため、みなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます。回答はすべて統計的に処理しますので、個人データが取り上げられるような心配はありません。

以下の項目にご回答いただき、担当講師まで提出してください。よろしくお願い申し上げます。

あなた自身についてお聞きます。

問 1-1. 平成 18 年 4 月 1 日時点での年代をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 10 歳代   2. 20 歳代   3. 30 歳代   4. 40 歳代  
5. 50 歳代   6. 60 歳代   7. 70 歳代以上

問 1-2. 性別をお答えください。当てはまる項目の数字に○をつけてください。

1. 男   2. 女

問 1-3. お住まいはどちらですか？市町村レベルでお答えください（例：福島市）。

（            ）

問 1-4. ご職業は何ですか？当てはまる項目の数字に○をつけてください。

「その他」の場合は「7.」に○をつけた上で（            ）内に具体的にお書きください。

1. 会社員   2. 公務員   3. 自営業   4. 専業主婦  
5. パートタイマー   6. 無職   7. その他（            ）

問 1-5. 最後に卒業した学校の種別をお答えください（例：4 年制大学卒）。

（            ）

昨年度（平成 17 年度）1 年間のあなたの生涯学習講座への参加状況についてお聞きます。

問 2-1. 昨年度 1 年間（平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月まで）に、いくつの生涯学習講座（大学・公民館・民間開設の種別を問わず）に参加しましたか？回数を（            ）内にお答えください。なお、一連の公開講座など（例えば、4 回の講演会で 1 シリーズとするなど）は 1 回と考えてください。

（            ）回

(1)

【裏面へ続きます】

今回受講された公開授業についてお聞きします。

問 3-1. 今回、この公開授業をどのような情報源からお知りになりましたか？当てはまる項目の数字すべてに○をつけてください。「その他」の場合は「6.」に○をつけた上で（ ）内に具体的にお書きください。

1. 新聞の折込広告
2. 新聞の記事
3. テレビ・ラジオ
4. インターネット
5. 知人・友人の紹介
6. その他( )

問 3-2. 今回受講された公開授業の難易度はいかがでしたか？

1. 易すぎた
2. やや易しかった
3. ちょうどよかった
4. やや難しかった
5. 難すぎた

問 3-3. 今回受講された公開授業に対する感想について、下の欄に自由にお答えください。

[ ]

福島大学の公開講座・公開授業に対するご要望についてお聞きします。

問 4-1. 今後、福島大学が行う公開講座・公開授業で、どのような内容（テーマ）の講座なら受講したいと思えますか？○はいくつつけても構いません。

1. 教養を重視した講座（例：文学・歴史や時事問題を紹介する講座）
2. 資格取得を目指す講座（例：行政書士や介護福祉士の資格取得講座）
3. 趣味を充実させる講座（例：スポーツ講座やガーデニング講座）
4. その他( )

問 4-2. 福島大学の公開講座・公開授業に対するご要望があれば、下の欄内に自由にお答えください。

[ ]

以上で質問は終わりです。

記入漏れの項目がないかどうかご確認いただいた上で、担当講師まで提出してください

ご協力ありがとうございました。

連絡先： 福島大学生涯学習教育研究センター

## 公開授業アンケート（担当講師用）

福島大学生涯学習教育研究センター

この度は福島大学公開授業にご参加いただき、誠にありがとうございます。  
今後、福島大学において企画・実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業を発展させていく上での参考資料とするために、講師のみなさまからのご意見をいただきたく、アンケート調査へのご協力をお願い申し上げます。

今回の公開授業についてお聞きします。

問 1-1. 市民の受講者が一般学生と一緒に授業を受けるという**公開授業の形態**についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください。

[ ]

問 1-2. 今回の公開授業の**設定回数**（試験期間を除いて原則開放）についてどう思われましたか？下の欄に自由にお答えください。

[ ]

問 1-3. 今回の公開授業に関する**全般的な感想やご意見**について、下の欄に自由にお答えください。

[ ]

本学の生涯学習支援活動全般についてお聞きします。

問 2-1. 本学の実施する公開講座・公開授業や生涯学習支援事業に対する**ご要望**について、下の欄内に自由にお答えください。

[ ]

以上で質問は終わりです。

記入漏れの項目がないかどうかご確認ください。

公開授業受講生のアンケート分と併せて回収用封筒に同封し、下記連絡先まで学内便等でお送りくださいますようお願い申し上げます。

ご協力ありがとうございました。

連絡先： 福島大学生涯学習教育研究センター 木暮  
内線 3372 (024-549-5010) kogure@educ.fukushima-u.ac.jp  
木暮の教員メールボックスは人間発達文化学類教員控室に設置されています。